

STUDIO KOMA

Vol. 5 + 6

The Mailgraph of Monthly Publication

2001.03.31

PHOTOGRAPHS WITH TEXT

TATSUANG / TATSUYA ATARASHI

© 2001 Tatsuya Atarashi tatsuang@bigfoot.com

TATSUANG

谷川岳

里山では梅の香漂う3月中旬、群馬県利根川源流域、谷川岳へと向かう。標高1977メートルと、僅かに2000メートルに満たないものの、日本有数の豪雪地帯、上越国境稜線の主峰として、然としたその姿は訪れる者の心を捉えて放さない。

ことに東側に展開される急峻な谷と岩壁は北アルプスの剣岳、穂高連峰と並び称され、多くのクライマーたちを魅了し続けている。



みるみる雪が付着してゆくダケカンバの木肌(表紙)。見事な枝振りが冬の厳しさを物語っている。谷筋を流れる湯檜曾川の積雪は幾層にも重なり、その上をテンが餌を求めて彷徨っていた。



冬の一の倉沢右又から衝立岩を臨む。初めて一の倉沢出合いからこの岩壁を臨んだのは25歳の秋だった。それまでクライミングに対する嫌悪感を持っていた私は、この岩場を見た瞬間無性に登りたい衝動に駆られ、迷わず市井の山岳会の門を叩き、その後何本かのルートに登ることになる。人生において大きな転機となった場所なのだ。今もその時の印象は色あせることなく、胸に焼き付いている。



朝の光を受け、湯檜曾川を隔てた谷川岳対岸の白毛門（1720メートル）が輝く（右）。ここから臨む谷川岳一の倉沢の岩壁は壮観だ。

関東有数のブナ林が広がる奥利根流域。とりわけ谷川岳周辺は冬の季節風が強く、背はさほど高くないが、枝の密生した、重厚なものが多い。



山頂へ 谷川岳周辺へは幾度となく通っているのだが、山頂付近の写真が一枚も無いことに気づいた。特に山頂を目指して登る時ばかりではないのだが、全く無いとは。

いささかショックを受け、それでは、と、今回積雪期のオーソドックスなルート、西黒尾根から山頂に向かってみることにした。

都心から近く、日帰りでも通える地域でこれ程の岩壁を有した山域は他に例がない。それだけに岩場を求める若者による事故も絶えなかった時代が続き、この山域だけでおよそ1000人余りの命が失われている。

それほどたくさんの人間が登っているとも云えるが、積雪も多く、もろい岩場は確かなクライミング技術と洞察力が要求されるとともに、幸運という知力、体力を超えたところでのプラスアルファーが必要なように思う。現在この山域の岩場は厳冬期の入山が県条例により禁止されている。

そもそもそのような条例があり、入山規制のある山域が北アルプス、剣岳とここだけであるという事実からも、冬の厳しさを想像できるだろう。厳冬期、マチガ沢、一の倉沢、幽の沢は雪崩の巣と化すのだ。昨春マチガ沢と湯檜曾川合流点で起きた全層雪崩に巻き込まれたボーイスカウトの遭難事故は記憶に新しい。

かといって過剰に恐れているには人生何事も前には進めない。プラスアルファーを信じ、時には運命の女神に身を託すことが必要な場合もある。

近年、日本の登山スタイルも変わり、山から若者が消え、代わりに中高年が増えるに従い、岩壁での事故は減ったようだが、代わりに以前では考えられないようなレベルでの事故が増えているように思う。ここで一々上げることはしないが、何れにしても、「なぜ山へ登るのか」・・・この基本的な問いかけを今一度山へ向かう人たち各々が自分自身に問い直す必要があるだろう。そもそも山は団体で行く場所ではないと思うのだが。

朝のうちは好天に恵まれ、気持ちよく撮影を進めながらの登山だったが、10時頃から俄に雲が拡がり、やがてみぞれ混じりの吹雪となった。やむなく早々に撤退を決め込み、昼には下山、またしても山頂の写真を撮ることはできなかった。

帰路、車で水上まで来た頃には空も晴れ上がり、穏やかな春の風が吹いている。谷川岳は厚い雲のベールに包まれたままだ。恐るべし、国境稜線。



谷川岳はトマノ耳、オキノ耳というふたつのピークからなる。関越自動車道、水上インター付近からはその双耳峰の姿を良く臨むことができる。(右)

思いのほか写真では吹雪の様子が判らないのだが、絶えず吹く横殴りの風に抗しながら撮った一枚(下)。山の天気は変わりやすいというが、中でも上越国境稜線の天候は急変する。2月までの厳冬期、里から谷川岳本峰を臨める日は何日も無いという。





谷川岳を目指す者にとって土合駅は心の拠り所となる。上越線下り列車ホームは、地下70メートルにある。ホームに降りたとたん目の前におよそ650段もの階段が立ちはだかる。嘗てこの階段を一気に駆け登り、競って岩場へと取り付いた若者たちがいた。

そんな昔の栄華も薄れ、現在、日に各駅停車が6本しか止まらない土合駅だが、待合室は24時間開放され、山を目指す者たちの憩いの場となっている。私自身幾度となくこの駅にはお世話になっている。たとえ車で行っても、わざわざこの駅舎を目指して仮眠を取ったりするのだ。